

読書通信

第4號
発行人: amagata

「小さな読書会」

「短編小説を読む」

第一回 国木田独歩「号外」

「総合的な学習の時間」に、みんなで同じ短編小説を読み、その作品のテーマについて考える読書会を開催することにしました。

第一回は国木田独歩著「号外」です。この作品は明治三十九年（一九〇六）に発表された小説なので、少々読みづらい部分もありますが、みんなよく食らいついてくれました。日露戦争後の銀座のバーが舞台です。登場人物はそこに集った「加藤男爵」「彫刻家の中倉」そして「自分」です。まず各々が考えたテーマは、次の三つに大別できます。

①戦争ではなく、外に何か、戦争のときのような心持に万人がなつて暮す方法は無いものか。

②加藤男爵は変わった人、特別な存在、つまり人間の号外だ。中倉の彫刻の題材選び

③一読でテーマ①を読み取った人はすばらしいと思いました。

最後に提出されたレポートでよかった作品を掲載します。

国木田独歩「号外」について

「戦争の時のような心持ち」

私はこの作品を読み、「戦争の時のような心持ち」と書かれたところに目が止まった。いろいろなことが書かれている中で、これがテーマなのではと感じた。

一つ目の理由としては、全体的に戦争についての事が多く書かれていたためである。国木田独歩は、戦争の何かに対して強く訴えているのだ。

二つ目は、文末に書かれていた、「戦争ではなく、外に何か、戦争の時のような心持に万人がなつて暮す方法は無いものか。」という部分だ。この文から、この戦争のない時代を生きる人々は、戦争をしていた人々の心持ちと比べ、何が欠けているのではないか。

最後の理由としても、やはり文末に書かれていることによつて、とても強調されているように感じたのだ。以上のことから、国木田独歩

は、「戦争の時のような心持」、つまり、お互いが助け合い、一人一人が生や死と向き合つて暮らすことの大切さを、私たちに訴えているのだ。

号外 国木田独歩



4班の発表用レジュメ

* * *

第二回 太宰治「桜桃」

第二回は太宰治著「桜桃」です。この作品は昭和二十三年（一九四八）に書かれました。この作品を書いた直後、太宰治は入水自殺をしました。命日である六月一九日は「桜桃忌」と名づけられ、いまでも多くの太宰ファンが墓所を訪れています。

作品は、「子供より親が大事、と思いたい。」で始まります。ある夏の夕食、夫婦喧嘩をし、父は酒を飲みに出掛けます。そこで桜桃をまずそうに食べ、心の中で呟く言葉は「子供よりも親が大事。」

個人的には、最後の方に書いてあった「生きる」という事は、たいへんな事だ。あちこちから鎖がからまっていて、

少しでも動くと、血が噴き出す。」が印象に残っています。みんなが考えたテーマは三つに分類できます。

- ①子供より親が大事、親のほう弱い。
- ②夫婦喧嘩
- ③親の苦勞

七班中四班が①のテーマでした。やはりこの言葉の印象が強かったのでしょう。レポートを一作品紹介します。

太宰治「桜桃」について

「親は子供のために苦勞する」

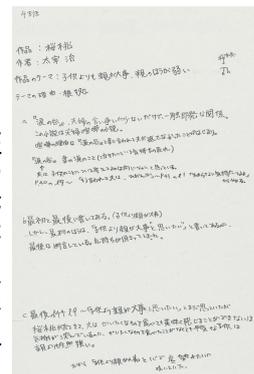
太宰治著「桜桃」のテーマについて考えてみたい。まず初めに「子供より親が大事、そう思いたい」とあったが、終わりには「子供より親が大事」と断言しており、作者がこころを尽くして子供に接しているのが伺える。

次に、作者の長男が「ごはんは実にたくさん食べる。けれども、いつも痩せて小さく」とあり、作者と妻が長男のことで心配しているのが解る。そして、「子供たちは、桜桃

など見た事も無いかも知れない」とあり、自分は、妻とめつたにすることのない夫婦喧嘩をしているのにもかかわらず、子供のことを思っているところから、本当に子供のためにいろいろなことをおもっていると思つた。

以上のことから作者が心から子供たちを大事にしようと思ひ、心の中で格闘していると考えたので、「親は子供のために苦勞する」というテーマにした。

4班の発表用レジュメ



* * *

国木田独歩も、太宰治も短編小説の名手と云われています。国木田独歩の作品では、鳥にあこがれる白痴の少年の死を描いた「春の鳥」は読みやすいと思います。太宰治のほうがみんなにとつては馴染みがあるのかも知れません。「走れメロス」は誰もが知っている作品でしょう。「富嶽百景」の一部はよく教科書にも載っています。他に「斜陽」「人間失格」が有名な作品です。

後記

今年の目標は大作を読むことです。光文社古典新訳文庫のドストエフスキーをすべて読了しようと思つています。現在最後の「カラマーゾフの兄弟」を読んでいます。